

# ワグナー音楽祭「あらかわバイロイト」の

# 「あらかわ」と「バイロイト」が目指すもの

文＝田辺とおる

前号に続き、「あらかわバイロイト」の船出に寄せる思いのたけを綴りたいと思う。

この企画が発信するメッセージは文字通り「あらかわ」と「バイロイト」。地域に根付いた劇場経営と、ワグナー作品の定期的な公演だ。

僕はドイツの地方劇場歌手だった。そこにはまさに「おらが街の小屋」という営みがあった。対象地域の総人口が、周辺郡部を合わせて約十五万人、予算は国立劇場の半分以下というコンパクトな劇場だ。街と街の間は農地というドイツと、密集した東京では事情も異なるが、乱暴に比較すれば、人口二十万の荒川区に存在しても可笑しくない劇場と同規模と言えるだろうか。

ドイツの地方劇場では殆ど全てを自分で賄う。オーケストラ・合唱・バレエはもとより、ソロ歌手・指揮者・俳優も月給制の専属。衣装・靴・舞台装置等は自前の工房で製作する。音楽・演劇・バレエを柱に据え、さらに多くの児童劇を制作して、夏休み前とクリスマス前に学校単位で子供たちを劇場に呼んでいる。在籍した九〇年代の北ハルツ劇場は、劇場職員二二〇・年間演目数四十・公演数五五〇・観客数延べ十五万で、一番多く出演したシリーズに僕は、百五十公演勤めた。

一方、荒川に限らず日本の公共ホールには、自前で公演するところはない。興行の九割は外部の主催者からホール代金を取る「貸し館」公演で、残りの「自主事業」と称する公演も、予算を付けて外部企画を買うというものだ。加えて最近では、公共ホールの運営を外部業者に委託して独立採算制を課す自治体が多く、興行リスクを負う自主事業の割合は減少傾向にある。

そういう日本のシステムの中にあっても、どうすれば「おらが街の小屋」的な活動を展開できるかという提言が、実は平仮名の「あらかわ」に込められているのだ。余所から名手を単発で招いても所詮は客演。終演後に残る財産は「記憶」だけだ。「あらかわバイロイト」主催の東京国際芸術協会は、荒川区の大小ホールを縦横に使って年間百近い演奏会やオペラを公演しているが、地元公演という存在感がまだ十分ではないので、プログラム中の最大企画である「あらかわバイロイト」を旗印に、区民優待・小劇場の連続公演・コンクールの区民賞創設・オペラ共演合唱団の募集など、地域に根付いた劇場経営を展開しようとしている。

「あらかわバイロイト」の、もうひとつのキーワード「バイロイト」の方は、ワグナー作品の定期公演というメッ

セージを込めたものだ。

一人の作曲家を特集した音楽祭や、歌劇場の「○○ウィーク」等は、ヨーロッパでは一般的だ。ワグナーに特化したバイロイト祝祭を始め、モーツァルト週間（ザルツブルク）、ロッシニ祭（ペーザロ）、ベートーベン祭（ボン）等「ゆかりの地」の音楽祭の他にも、ウイーン・ミュンヘン・ベルリンといった大都市の劇場が随時開催する「ヴェルディ週間」のような企画物は少なくない。

一方、日本のオペラ公演では外来オペラ・国立劇場二期会などの大手団体・民間オペラのいずれも、選曲の統一性があまり意識されていない。流行も料理も世界中から取り入れる柔軟な？日本人の好みなのだろうか。もっとも、器楽の演奏会には作曲家をテーマとした企画があるが、オペラの場合は規模が大きくて連続できないのかもしれない。

しかしオペラでも、腰を据えて継続的に一人の大作作曲家と向き合うということがあっていいだろうと思う。殊にワグナーは前号に書いたとおり、日本人の公演記録自体がまだまだ貧弱なのだ。ドイツでは地方劇場もどんどん公演する。僕のいた時期にも「さまよえるオランダ人」や「タンホイザー」

が掛かり、過去には大規模な「マイスタージンガー」の上演記録まであった。もちろん国立劇場と同規模にはできない。オケや合唱の人数は少ないし舞台装置も豪華ではない。チケット価格は一流劇場の数分の一だ。でも、やる。

そういう事を「あらかわバイロイト」は発信したいと思う。フィガロやカルメンや椿姫ならば、別に歌が簡単な訳ではないのに豪華公演から民間オペラまで選び放題だが、ワグナーでは、殆ど豪華公演しかない。高価な海外オペラや国立劇場の公演が目白押しを東京にあって「手の届くワグナー」を目指したい。

第一回目に「パルシファル」を選んだ理由もここにある。日本の音楽界にとつて最も縁遠いワグナー作品を敢えて「手の届くところまで」という思いを込めた。そして、この作品の悠久の時間を体感して欲しい。並みのオペラの2倍の時間をかけて内容を語りこむ世界に、身を委ねる快感。飽きるどころか時間を満たす贅沢なサウンドに包まれる快感。晩年のワグナーが織り成す匠の魔術を御客様に伝えることができるか。我々演奏者一同は今、このテーマと向き合っている。真に偉大な作品と接する感動に打ち震えながら。

Wagnerfestspiele  
"Arakawa-Bayreuth"



■たなべ・とおる

ドイツの「北ハルツ劇場」専属歌手としてオペラからミュージカルまで出演した後、ベルリンで俳優業にも活動を広げる。映画「ラストサムライ」では渡辺謙の声を吹き替え（独・仏・西語）・ドラマ・CM・ベルリン・シエルクスピアカンパニー「十二夜」などに出演。二〇〇〇年以降は国立劇場をはじめ、日本のオペラにも多く出演し、モーツァルト・ワグナー・Rシュトラウス・ドニゼッティ・ロッシニ・ヴェルディ・プッチーニなどの諸作品で好評を博した。NHK音楽番組からバラエティーまでテレビ出演も多い他、雑誌連載や楽譜編集でも健筆を揮う。国立音楽大学講師。東京二期会会員。  
www.tanabe.de